

# 川端康成「薔薇の家」論

—愛の「おとぎばなし」の実現を描く—

吉野 莉奈

## 序

「薔薇の家」は、川端康成が愛の「おとぎばなし」の実現を描いた作品である。川端文学では「おとぎばなし」という語が度々登場するが、その一つとして本作品が挙げられる。優しい愛の永続<sup>1</sup>「美しいおとぎばなし」の完成を表現しているのが、本作「薔薇の家」である。

川端は昭和七年二月から昭和二十一年一月の間、『少女倶楽部』に小説を九作発表している。「薔薇の家」はその一つである。同誌の第一二巻第二号（昭和九年二月）に掲載された。他の『少女倶楽部』掲載作品はすべて『綴長の探偵』（中央公論社、昭和二十二年二月）に収録されたのに対し、「薔薇の家」のみ、『少女の友』で連載された「乙女の港」（昭和二十二年六月号、昭和二十三年三月号）とともに、『乙女の港』（実業之日本社、昭和二十三年四月）<sup>1</sup>へ収録されることとなった。また、「薔薇の家」発表の七年前、同じく少女誌に掲載された作品として「薔薇の幽霊」（『少女世界』昭和二年一月号）<sup>2</sup>がある。両作品は、美しい女教師が山奥にある花の村へやってくることや、巴里からの帰国子女である（お嬢さん）が薔薇の家で亡くなった点が共通しており、「薔薇の家」は「薔薇の幽霊」の改作と考えられる。

「薔薇の幽霊」及び「薔薇の家」の先行論者として、中嶋展子が挙

げられる。中嶋は「薔薇の幽霊」から「薔薇の家」への異同を明らかにし、「薔薇の幽霊」より「薔薇の家」のほうがさらに、「女同志の愛」のテーマが深められていると論じている<sup>3</sup>。また中嶋は別稿において、「薔薇の家」では、先生と薔薇の少女と呼ばれるお嬢さんとお嬢さんを慕う芳子の関係が、永久的に続くことを暗示<sup>4</sup>している指摘している<sup>5</sup>。他に本作を単体で扱う先行論はないが、この作品は川端康成の「児童文学」「少女小説」の一つであると位置づけられ、川端の「少女小説」論では度々取り上げられている<sup>6</sup>。

ところで、川端康成の文学には、しばしば「おとぎばなし」という語が登場する<sup>7</sup>。「薔薇の家」もその一つとして挙げられる。それらの小説の中で、「おとぎばなし」の実現が描かれているのが「薔薇の家」の特徴である。

「美しいおとぎばなし」は、「薔薇の幽霊」には登場しなかった言葉であり、本作の主題を読み取るためのキーワードである。「美しいおとぎばなし」の実現とは、亡くなったお嬢さんの言葉から生まれた薔薇の精が、いつまでも益田先生と生きることができる世界の誕生であり、この作品においては優しい愛の永続を意味している。

本稿では、主題の考察とともに、「薔薇の家」が「おとぎばなし」の実現を描くという川端の意図の成功した作品であるということも論じていきたい。構成は以下の通りである。第一節では人物形象及び

「薔薇の幽霊」からの異同を分析し、それをもとに〈薔薇の精〉の正体について考察した。第二節では、本作で描かれた「愛」とは何か、その多義性について論じている。中嶋の指摘の通り、本作では「女同志の愛」が描かれている。しかし「美しいおとぎばなし」における愛とは、果たしてお嬢さんと芳子との一対一の関係のみといえるのか、人物関係に基づいて分析している。第三節では、薔薇と椿とを比較し、「薔薇の家」の創作性がどこにあるのか明らかにした。第四節では、本作には「美しいおとぎばなし」を実現させる川端の意図が表れていることについて論じている。結では、「少女のための小説」という観点から、「薔薇の家」において「おとぎばなし」の永続を描けた所以について考察した。

## 一、薔薇の精の正体

「薔薇の幽霊」と「薔薇の家」、この二作の違いの一つは〈薔薇の精〉の正体である。この節では、「薔薇の家」における薔薇の精の正体を、人物形象に着目することで考察したい。

改作により、芳子が登場人物として加わったことは、薔薇の精の正体を考えるにあたって非常に重要な意味を持つ。「薔薇の幽霊」においては、薔薇の精の正体は薔薇の家で亡くなったお嬢さんの幽霊であった。しかし、「薔薇の家」では芳子の登場により、薔薇の精の女教師に対する献身が心霊現象でなくなっているのである。

作品をシンプルに読むならば、益田先生に気配りをしていたのは芳子であり、薔薇の精は芳子であった、ということになる。しかし読みを深めていくと、簡単にそうといえないことが分かる。

その根拠として挙げられるのが、鹿が薔薇の家の薔薇を踏みしじろ

うとした事件の顛末である。益田先生の勤める小学校で飼っている鹿は、初めこそ野性であったが、事件が起こった時にはもうすっかり「児童のお友達」であった。益田先生の荷物と角にひっかけて薔薇の家までお伴をしていた。鹿は児童たちや益田先生に馴染んでいる様子であり、村の人々に対しても同じであろうと考えられる。

しかしその日、鹿は薔薇の茂みを見ると急にいきり出し、山の獣に戻ったかのように花を踏みしじろうとする。

ところが今日はどうしたのでせう。うひうひしい花が咲きはじめた、薔薇の茂みを見ますと、鹿は急にいきり出して、山の獣に戻ったかのやうに荒つぽく、角で枝を掻き分けながら、薔薇畑を突き進んで、薔薇を踏みしじりさうな勢ひを見せました。

「あつ！」／と益田先生は思はず胸を押へると、青ざめて倒れさうになりました。／先生は自分の心臓が、鹿の角で突かれたか、蹄で蹴られたかのやうに痛んだからでありました。薔薇畑のなかに、女の啜泣が細々と聞えたやうな気がしたからでありました。

この事件により、益田先生は初めて薔薇の精を認識することとなる。鹿は恐らく、薔薇の茂みの中に、薔薇の精という、この鹿にとつては馴染みのない存在の気配を感じたと考えられる。そこにいたのが芳子であったとすれば、ずっとこの村に住んでいる彼女の気配で鹿が暴れだすのは違和感がある。また、芳子は益田先生の留守中に薔薇の家を整えており、作品のクライマックスに益田先生が不意打ちでお昼休みに帰宅するまで、先生と薔薇の家で遭遇したことがなかった。

益田先生の帰宅時間まで、芳子が薔薇の家に留まっていたとは考えづ

らい。したがって、ここにいたのは芳子ではないということが、この鹿の事件の描写によって示されているのではないか。この出来事によって、薔薇の精≡芳子である、と簡単に片づけられないことが分かる。

薔薇の精の正体を明らかにするために、続いて芳子とお嬢さんの人物形象を見ていく。芳子について説明されていることは、光子の姉であること、「四年も、もつと前」に薔薇の家に住んでいたお嬢さんの世話をしていたこと、お嬢さんが亡くなった後も同じように薔薇の世話をしていたことである。そして彼女は「私のことなんか忘れて、薔薇の精のお嬢さんがこの家に住んで、先生のお世話をいろいろするのだと思つてあげて下さい」と益田先生に頼んでいる。芳子はあくまで薔薇の精の影として、益田先生に献身している。

次にお嬢さんであるが、彼女の父は巴里の大使館に勤めていて、お嬢さんもフランスに住んでいた。「やさしい娘文字」を書く人である。芳子は益田先生の女学校三年生の時の写真を見て涙を流していることから、お嬢さんの亡くなった年齢もそのくらい、一五歳程度であると考えられる。お嬢さんについて芳子は「益田先生のやうに美しい方」と言っており、女学生時代の益田先生と同じく「張り切つた高い頬や高い鼻のあたりが、西洋の少女めいた美しさ」であつたと推察できる。彼女は身体を悪くしてフランスからひとり日本に帰り、芳子の住む村には養生の目的で来ていた。フランスの家には薔薇が沢山咲いていたので、村で住む家にも薔薇をいっぱい植えた。薔薇の家を生み出したのはお嬢さんである。益田先生の言葉を借りると「芸術家」のようなセンスがあつたということになる。お嬢さんは、「芳子、私は死ぬんぢやないの、薔薇の精になるの」と残り、薔薇の花の咲くなかで亡くなった。

お嬢さんの人物像についての記述は、芳子と比較すると明らかに多い。このことから、芳子は影の存在であるということが分かる。あくまで薔薇の精の正体はお嬢さんである、という体を取っている。しかし、薔薇の精の正体はお嬢さん、と結論付けることはできない。薔薇の精の候補はもう一人いる。益田先生である。彼女が春を連れて花の村に引越してきたことにより、この物語は始まっている。益田先生もまた「美しいおとぎばなし」の完成に必要な存在であり、もう一人の薔薇の精として描かれている。それを明らかにするため、次に「薔薇の幽霊」の主人公である片岡千代子先生と、本作の主人公である益田先生の人物形象とを比較したい。

片岡先生と益田先生とを比較すると、益田先生のほうがはるかに、薔薇に喩えられたり、薔薇の精として扱われたりしている回数が多い。片岡先生と薔薇とが直接結びつけられているのは、片岡先生の言葉、「私は薔薇の精になつてしまつたのかしら」「私、薔薇の精になつてもいいわ」のみである。

益田先生は物語冒頭で、光子に「白薔薇の精ではないでせうか」と思われている。

益田先生の荷物だけを見ても、花やかな春の使が山へ来たかのやうに、村の子供は目を見張つたくらゐるものですもの、先生は学校へ来たその日から、もう少女達のあこがれの的になつてしまひました。野菊の花の群のなかに、一輪の薔薇の花が咲いてゐるやうであります。／＼ほんたうに益田先生ほど、薔薇の家に似つかはしい人は、二人とありますまい。白薔薇のやうに気高い人でしたけれど、まだ若い先生には、赤い薔薇のやうな女学生らしさも残つてゐるのでした。

右記のように、女子児童の中に益田先生がいるありさまは、「野菊の花の群のなかに、一輪の薔薇の花が咲いているやう」と喩えられている。「薔薇の家に似つかはしい人」であり、「白薔薇のやうに気高い人」であるが、「まだ若い先生には、赤い薔薇のやうな女学生らしさも残つて」おり、「薔薇の先生」と呼ばれている。片岡先生と同様、「今に私は、薔薇の精になつてしまふかもしれない」と述懐する。益田先生の場合は、片岡先生のそれに加えて、「私は美しいおとぎばなしの主人になつて暮しますわ」と校長先生に伝えるその姿が「これこそまことに薔薇の精のやうに見える」と描写されている。以上のように、益田先生は薔薇であること、薔薇の精であることが繰り返し語られているのである。

つまり、本作には「薔薇の精」お嬢さん」「薔薇の精」益田先生」という二つの構図が存在することになる。そこに芳子の献身が加わることによつて、二人の薔薇の精が交わることになるのである。

そして芳子は、益田先生をお嬢さんと同一視している。芳子はお嬢さんについて「益田先生のやうに美しい方でしたわ」、益田先生について「私も先生を見てをりますと、お嬢さんが生き返つてらしたとか思へませんわ」と言っている。お嬢さんと益田先生との同一視は、二人とも村の外からやつてきた美しい異邦人であるという点が共通しているからと考えられる。薔薇の家について、益田先生は「この村へ私があるのを、何年も前からちやんと知つてゐて、私のためにこしらへておいてくれたやうなお家ね」と言っている。何年も前に村の貸家を薔薇の家にしたのはお嬢さんであり、お嬢さん＝益田先生という宿命的な繋がりは、益田先生によるこの言葉からも読み取ることができ

る。

薔薇の精の正体は誰なのか。薔薇の精は、特定の誰か一人を正体と

して決めつけることができない。「薔薇の幽霊」と違い、「薔薇の家」の薔薇の精は特定の人物を指す幽霊ではない。お嬢さん・益田先生・芳子の三人が揃つてこそ生きることができる。

薔薇の家で起きる不思議な出来事を「薔薇の精だと思つてゐたの」と言う益田先生に対し、芳子は「美しいお方、やさしいお方」と喜びをあらわにしている。「薔薇の精」「おとぎばなし」を信じることは優しさとされている<sup>8)</sup>。芳子の愛と、お嬢さんの存在、益田先生の美しさや優しさ、すべてが揃つて薔薇の精は生命を与えられているのである。薔薇の精の正体とはつまり、美しく優しい愛の象徴であるといえよう。

## 二、「薔薇の家」で描かれた愛の多義性

前節の考察により、薔薇の精の正体は複合的であり、それゆえに優しい愛の象徴として描かれていることを明らかにした。この節では、「薔薇の家」において描かれている「愛」はどのような愛情のことを指しているのか、人物関係に着目することで検討したい。

薔薇は大正期において既に、恋のアナロジーを持つ花であったことが張競によつて指摘されている<sup>9)</sup>。しかし薔薇の花は恋愛のみならず、聖母マリアのアトリビュートとして、清純な愛の象徴の側面もあり<sup>10)</sup>、『少女俱樂部』『少女の友』に掲載された小説や随想においては、抒情的な悲しみを伴う愛のイメージを持つて薔薇が語られていた<sup>11)</sup>。薔薇の花が持つ愛のイメージには多義性がある。

薔薇の多義性を反映しているかのように、本作で描かれる愛情は、芳子とお嬢さんとの「女同志の愛」のみにとどまらない。益田先生が薔薇の精に対して抱くいたわりや、先生を慕う女子児童たちの憧れも

描きこまれている。「薔薇の家」における「愛」は一義に絞られることなく、その重層性が作品の豊かさに繋がっている。

本節で分析の対象とするのは、益田先生と薔薇の精、益田先生と児童たち、芳子とお嬢さんとの関係である。

益田先生の薔薇に対する、「薔薇の花をこんなに愛してゐるのでも」「薔薇だわ。薔薇の精だつたのだわ。(中略)その子と二人で住んで、私はちつとも寂しいことなんかありやしない」「薔薇の少女と二人で、仲よく、いつまでも薔薇の家で暮すことよ」といった言葉からは、彼女の薔薇の精への愛情を読み取ることができる。

また、益田先生は鹿に乱された薔薇に対して、「怪我をした妹でも、撫でさするかのやう」な気遣いを見せている。春休みの帰省から薔薇の家へ戻った時には、「よく一人で待つてゐてくれたわね。寂しかったでせう」と、なつかしげに語りかけ、優しく接している。校長先生に薔薇の家での怪奇現象を、「たいへんよく気のつく、お母さんか妹が、陰でそつと身のまはりの世話をしてくれてゐるといつた風なことばかりなんですけど」と説明している。益田先生から薔薇の精に抱く感情は、家族に対する気持ちであるように読み取れる。益田先生は薔薇の精のことを「薔薇の少女」と呼んでいる。恐らく薔薇の精のことは自身より年少と捉えていると推察でき、妹に対するかのような愛情を抱いているといえる。

次に、益田先生と児童たちとの関係を見ていく。益田先生が引越してきた日、花合戦をしていた村の少年少女達は、やってきた麗人が小学校の新任の先生であると気付くと、手を取って小躍りし、後ろ姿に思わずびよこりとお辞儀して、顔が赤くなるほど喜ぶ。益田先生は学校へ来たその日から「少女たちのあこがれの的」となった。気高く且つ若々しい益田先生に対して、女子児童たちは憧れを抱きながら懐

いている。また、「薔薇の幽霊」と「薔薇の家」とでは登場する児童にも違いが見られ、本作では名前が与えられている児童として、雪子が増えている。雪子を増やす事で、少女たちに愛される益田先生の姿、児童たちの先生への親しみがより生き生きと描写されている。児童たちの益田先生への憧れが、「薔薇の幽霊」よりも強調されているのである。

最後に、芳子とお嬢さんとの関係についてである。芳子は、病氣療養のため村に住んでいたお嬢さんの身のまわりの世話をしていたこと、そしてその頃のように、正体を隠して益田先生に対しても尽くしていたことは先に述べた。お嬢さんとは「ほんたうのお友達」であった。お嬢さんが亡くなった今、芳子は薔薇の精をお嬢さんそのものとして捉えている。お嬢さんが亡くなったとき、芳子に残した「私は死ぬんぢやないの、薔薇の精になるの」という言葉を信じているがゆえである。

二人の関係を暗示する詩の文句がある。益田先生は、薔薇の家に掛けてあつた絵として、光子を通して芳子から色刷りの絵を貰うが、その裏には「女同志の愛を思はせる目付の薔薇の花よ／百合の花よりも白くて、女同志の愛を思はせる目付の薔薇の花よ」<sup>⑩</sup>と優しい娘文字で書かれていた。これは前の住人であるお嬢さんが書いたと思われる。芳子とお嬢さんとの間には「女同志の愛」があつたと暗示されている。恐らくその愛とは恋愛か、或いはそれに近いものであつたと考えられる。芳子が、お嬢さんと益田先生とを同一視していたことも先述の通りである。

以上のことより、益田先生から薔薇の精への家族(妹)に対するかのような優しさ、児童達の先生に対する憧れや親しみ、芳子のお嬢さんに対する恋のような「女同志の愛」と、多様な愛情が「美しいおと

ぎばなし」の空間を満たしていることが分かる。

本作の描く愛の多様性については、作品結末部を飾る駒鳥にも表れている。益田先生は芳子に貰った駒鳥を飼うことになり、その餌の世話や水浴びは芳子が行っていた。戦後の川端は小鳥と少女との愛について、少女誌『ひまわり』（昭和二四年六月）で以下のように述べている。

——少女も小鳥を飼うといいですね。汲んでやった水を、小さなのをふくらませて可愛く飲んだり、ひろげた羽をふるわせながら自分の掌の中の餌を甘えるように赤い嘴で食べる小鳥の様子は、きつと少女にも可愛く思えるやうになるでせうからね。なんと言つても愛情を持つということが少女を一等美しくさせるのですからね。<sup>14</sup>

ここでの「愛情を持つ」というのは小鳥に対する慈愛であると考えられる。可愛いと思う対象に尽くす愛情も、駒鳥を通して匂わせているのである。

以上の考察の通り、「薔薇の家」における「愛」は特定の愛情関係を指すものではない。お嬢さんと芳子との「女同志の愛」を中心としながらも、本作ではいくつかの種類の愛情を描いているといえる。このことは、「薔薇の家」を特定の恋愛物語とせず、あくまでも「美しいおとぎばなし」とする要素と言える。さまざまな愛の、肯定的な側面のみを描いているのが「薔薇の家」である。

### 三、薔薇と椿との比較

「薔薇の家」の主題を担う花が薔薇であることは言うまでもないであろう。一方、作品の冒頭を飾るのは椿の林である。椿は児童たちの花合戦に用いられ、村にとつて馴染み深いものとして描かれている。異邦人が住む薔薇の家の花とは対照的である。

「薔薇の家」の舞台、「椿の林のある南国の半島」にある「花の村」は、先行論で伊豆湯ヶ島と推測されている。<sup>15</sup>川端の「伊豆温泉記」〔改造〕昭和四年二月号<sup>16</sup>）を読むと、彼が伊豆を特徴づける花は椿と石楠花としていることがわかる。しかし、彼が伊豆のことを書いた随筆には、薔薇については特に触れられておらず、おそらく「薔薇の家」における薔薇の家は川端の創作であろう。川端の他作品を参照し薔薇と椿とを比較すると、薔薇は山の村には馴染みのない花・西洋的でハイカラな花・美人を表す花であり、伊豆の象徴である椿に対して、異質な花であると言ったことが分かる。そこに「薔薇の家」の創作性が強く表れている。

本節では川端康成が椿を描いた作品として、「薔薇の家」と同じく『少女倶楽部』に掲載された「駒鳥温泉」（昭和二〇年二月号）<sup>17</sup>と、『創作時代』の「椿」（昭和三年三月号）<sup>18</sup>とを取り上げる。

「駒鳥温泉」は伊豆の旅館、湯本館の娘である朝子と、東京の友達で毎年湯治にやってくる美也子が、二人で女学校の試験に挑む話である。東京からやってきた美也子の為の「歓迎の花束」として、紅椿の小枝が用いられている。椿は正月の花として扱われている。

「椿」は初出時に「南国の娘に与へる手紙」という副題が添えられていた。<sup>19</sup>語り手は、正月の慰安で、熱海の宿に泊まっている。その宿から、伊豆のさらに山のほうの温泉宿の女中、お加代にあてた書簡と

いう形式で書かれている。語り手はお加代の地元・熱海での葬式で、供花としての椿を見て「みづみづしく見惚れ」、その椿の赤い花を見ていると、「どうしても若い娘としか思へないのだ。紺の木綿の仕事着を着た頬の紅い南の漁村の娘としか」としたためている。

昭和初期の川端作品では、椿の花は伊豆の象徴であったということがうかがえる。そしてそこには南国というあたたかいイメージが伴っていた。<sup>20)</sup>

一方で、伊豆における薔薇はどうであろうか。次に、川端が薔薇を描いた作品である「美しき墓」(『新潮』昭和四年三月号)<sup>21)</sup>と、「東京の人」(『北海道新聞』『中部日本新聞』『西日本新聞』昭和二年五月〜三〇年一〇月)<sup>22)</sup>とに着目し、湯ヶ島に薔薇の庭を描いたことによる「おとぎばなし」の虚構性について分析したい。

「美しき墓」は、富豪である女社長が、生まれもって障害を持つ息子のために、その富を使って山奥の村に安住の王国を作ろうとする話である。しかし息子は「奇蹟を現はす魂を持った片端」ではなく、また「人情の美しさは山深く尋ねても、もうこの世にはない」ようであり、その夢は挫折する。息子の為の御殿のまわりには薔薇垣が植えられていた。その薔薇は、山の住民たちの見慣れぬ、御殿の温室の西洋草花と同じく、根から切り取られて若い領主の棺を飾ることになった。この作品から、川端文学において、薔薇は山奥の温泉がある村には馴染みのない花であったこと、女社長が息子のために作ろうとした安住の王国の象徴であったことが読み取れる。

「東京の人」の主人公公平井敬子の趣味は薔薇の栽培である。薔薇は美人の花であり、少なくとも川端文学で描かれた「伊豆」には異質であることが、この作品を読むと分かる。「東京の人」において薔薇は美人を象徴する花であり、年齢より若々しい美しさを持つ敬子と、そ

の娘の朝子・弓子とが住む家は、「ばら屋敷」と呼ばれていた。子供の頃の敬子にとっては「ばらの咲いた、ハイカラな庭」は憧れであった。川端は「伊豆の娘」(『婦人公論』大正一四年八月号)で、「伊豆には美人が絶対いませんね。」と述べている。このあたりの土地の人には割合特色がなく、娘たちの風俗や習慣もそれと同じであり、川端は伊豆の田舎で「動かない境遇」というものについて感じたを書いて<sup>23)</sup>

「美しき墓」と「東京の人」の表現から、薔薇は山の村には馴染みがない花であること、西洋的でハイカラな花であること、(伊豆にはいないと川端がいう)美人を表す花であり、伊豆の象徴である椿と比較してみると、湯ヶ島において薔薇の花が異質であるということが分かる。<sup>24)</sup>

益田先生及びお嬢さんは、異邦の地からやってきた美しい女性であり、川端が描く「湯ヶ島」には本来いない存在であることが改めて分かってくる。椿の村に、薔薇の「おとぎばなし」を生み出したのである。小学校で飼っている鹿が薔薇の庭で急に暴れ出し、花を踏みにじろうとしたのは、薔薇の家とそこにいる薔薇の精という、異質なものへの抵抗と見ることが出来る。

#### 四、「美しいおとぎばなし」は実現したといえるのか

##### 白薔薇と赤薔薇

優しい愛の象徴である薔薇の精が生きる「美しいおとぎばなし」は、実現したといえるのか。川端にその意図はあったのだろうか。本節では、薔薇の描写や結末部に着目して川端の意図を明らかにしたい。

「薔薇の家」では、薔薇の花の表現は視覚的なものが多い。特に重要とされているのが薔薇の色である。「薔薇の幽霊」「薔薇の家」ともに、主人公の先生の家を囲う薔薇の色について言及したシーンがある。どちらにおいても先生が児童光子に花の色を聞くシーンである。

「薔薇の幽霊」では、片岡先生からの問いかけに光子は「南の庭は真紅な花で、北の窓の花は真白でしたわ。」と答える。片岡先生は「そんな風に、薔薇を植えたのはきつと芸術家ね」と応える。

それに対して、「薔薇の家」では家の周りの薔薇の色についても異同が加えられていた。「薔薇の家」の薔薇は、「南の庭は真白な花で、北の窓は真赤な花」である。「薔薇の幽霊」では北が白花、南が赤花であったが、本作では北が赤花、南が白花と反対になっている。

益田先生は北に赤を、南に白を配置している点について、「ちよつと考えると、南は赤で、北は白のやうだけれど、もつとよく考えると、明るい南は白い花を咲かせて、日蔭の北窓は赤い花で飾つた方が、どれだけいいかしないわ。さうね、そんな風に薔薇を植えた人は、きつと芸術家ね」とコメントしている。この益田先生の言葉から、「薔薇の家」では「薔薇の幽霊」の時より、改作にあたって川端が花の色の配置に、さらに工夫を加えたことが分かる<sup>(25)</sup>。

「薔薇の家」において、赤薔薇と白薔薇が象徴するのはそれぞれ何か。益田先生が引越してきた日、光子が先生を「白薔薇の精ではないのでせうか」と疑つたのは、益田先生が「この世のものとも思へぬ清らかな美しさ」だからであった。さらにその後、益田先生は「白薔薇のやうに気高い人」と讃えられている。つまり、白薔薇は清らかさと気高さを表す花である。お嬢さんと芳子との愛を暗示する詩の文句は「百合の花よりも白くて、女同志の愛を思はせる眼付の薔薇の花よ」であり、百合は純潔を表す花であることから、白薔薇の清らかさ

はここにおいても強調されている。

対して赤薔薇はどうか。益田先生は先述したように「白薔薇のやうに気高い」人であるとともに、「赤い薔薇のやうな女学生らしさ」も残っていると描かれている。益田先生が薔薇の精の姿を思い浮かべるシーンでは、「白薔薇の着物を着て、赤薔薇の頬をしようと、少女の姿をいろいろ心に描いてみるのです」と書かれている。頬といえば、益田先生が校長先生に「あなたが薔薇に好かれたんですよ」と言われた時、益田先生の様子は、「なにかはにかんで、頬をほんのり薔薇色に染めながら」と描写されている。また先述の通り、薔薇の家では南側に白薔薇、北側に赤薔薇が植えられているが、「日陰の北窓は赤い花で飾つた方が」と説明されている。明るさを添える飾りとしても赤薔薇は用いられている。したがって、赤薔薇は少女らしさや可愛らしさ、花やかさ、さらに加えるなら頬に血が通う生気を表していると考えられる。

何故薔薇を二色にしたのか、川端の意図するところが最も表れているのは結末部である。この物語は「益田先生と芳子とは、この時、申し合はせたやうに、涙に濡れた眼で薔薇の絵を見上げますと、北窓の紅薔薇のなかで駒鳥が、美しい夢の歌を歌つてをりました」という一文で締めくくられている。美しい夢の歌とは、益田先生が「美しいおとぎばなし」を信じて、薔薇の精と二人で仲よく、いつまでも薔薇の家に暮すことを指していると考えられる。「美しいおとぎばなし」が歌われるのは、少女らしく花やかで、生を思わせる赤薔薇の中がふさわしいのである。

また、安住の王国を作ろうとして失敗した作品である「美しき墓」を読むと、白薔薇は死のイメージも伴っていることが分かる。

華々しい葬式——息子にしてやれることは、もうそれしか残つてゐない。さうも考える程、彼女は片端の子の母であることに疲れた。／＼せめて母の望み通り、華々しい葬式をさせるためかのように、若い領主はことりと死んだ。

「毒を飲んだんださうだ。」と噂しながら村人は誘ひ合せて悔みに行つた。

「あれぢや死んだ方が、若様もしあはせだべ。」

その声で門の薔薇垣から、女が刃のやうな顔を振り上げた。女社長であつた。今年初めて咲いた白薔薇であつた。彼女は人民共を睨んだまま、はらはらと涙を落した。<sup>26</sup>

息子のお悔やみにやってきた村人達を睨む女社長と共に登場するのは「白薔薇」である。<sup>27</sup>

さらに、川端が「おとぎばなし」をテーマとした他の作品として、「ナアシツサス」(『若草』昭和二年一月号)<sup>28</sup>が挙げられるが、この作品ではギリシヤ神話における赤薔薇の由来に触れており、「ヴィナスが最愛の美少年アドニス<sup>29</sup>の危急を救はうとして、夢中で走つた時に、雪白な足を薔薇の棘にひつかけて流した血の滴が紅薔薇」とある。赤薔薇には、愛のアナロジーがより強く表れている。

益田先生のことを「白薔薇の精」と喩え、お嬢さんが「百合の花よりも白くて、女同志の愛を思わせる薔薇の花よ」という詩を書き残した描写をいれながら、最後は赤薔薇で締めくくつたのは、白薔薇から連想させられる死や悲しみのイメージを避ける意図があつたと考えられる。川端は、「おとぎばなし」の清らかさを描く為に白薔薇を用い、「美しいおとぎばなし」の達成を明るく飾るために、赤薔薇の中で物語を終わらせているのである。

### 「美しいおとぎばなし」の永続性

「薔薇の家」には、「美しいおとぎばなし」の永続を描こうとした川端の意図が見られる。以下に挙げる「薔薇の幽霊」との異同がそのことの証左となっている。

「薔薇の幽霊」結末では、片岡千代子先生が母親の亡くなったことを理由に薔薇の家を離れ、古里へ帰ることになっている。しかし「薔薇の家」では益田先生が「薔薇の少女と二人で、仲よく、いつまでも薔薇の家に暮すことよ」と宣言しており、美しき女教師が薔薇の家を離れざるを得なくなる、という展開が変更されている。

季節を春に設定している点は両作に共通しているが、「薔薇の幽霊」においては、冒頭部は「この山峡に河鹿がなき、石楠花が咲けば春の闌です。(中略)昔ながらの日本の笛を吹くやうなその声は、春よりも秋にふさはしい気がします」、結末部では「けれども、薔薇が散つて、夏が去るやうに、秋が来て山川の鮎が海へ下つて行くやうに」と、秋を匂わせる表現が描かれている。

対して、「薔薇の家」には「秋」という言葉が登場せず、薔薇が散る描写がない。女子児童光子と雪子は、第一節では尋常五年生とされているが、第三節では六年生になっている。つまり作中では一年の時間が経過しているにもかかわらず、本作で描かれているのは「一年中で一番楽しい時」である春の季節のみなのである。

益田先生が薔薇の精といつまでも暮らし続けると芳子に宣言する点、薔薇の散らない春の季節しか描かれていない点からも、この作品で、愛の象徴である薔薇の精の永遠の生、「美しいおとぎばなし」の永続を描こうとした川端の意図を読み取ることが可能なのである。

## 美しい夢の歌を歌う駒鳥

赤薔薇の中で物語が締めくくられているのは、作品を明るさで飾るためであるが、その赤薔薇の中で駒鳥が夢の歌を歌っているという点も重要である。この結末部を、他の川端文学の結末と比較してみると、この小説で明るさを描こうとした川端の意図がより鮮明になる。

先ほども取り上げた「東京の人」では、敬子の夢の中、白いクライミング・ロオズのもと行われた敬子と昭男の愛の交歓は、鶯の死によつて悪夢へと転じている。現実の二人の結末もまた別離であった。

他に鳥の姿が結末を暗示する作品として「愛」（前半部を「愛』『オーレル読物』昭和十三年七月号、後半部「大牡丹』『新女苑』昭和十四年一月号）<sup>29</sup>が挙げられる。この作品は妹と姉、姉の恋人を巡る三角関係を描いている。妹と姉は心中しようとするが、姉だけが生き延びる。姉の前で、永遠の処女の肌のようにきれいな鳥である大牡丹が、飼い主に促されても鳴かなかつたというシーンが結末で描かれている。妹の「（愛についての）美しい物語」と心中しようとしたが、結果として生き延びた姉の凶々しさを感ずると、大牡丹は鳴かないのである。それらと比較すると、駒鳥が美しく歌っている姿で終わる「薔薇の家」は幸福の印象を与える。

## 結

川端が「薔薇の家」より二年前に、同じく愛の「おとぎばなし」を描いた作品として、「抒情歌」（『中央公論』昭和七年二月号）<sup>30</sup>が挙げられる。語り手の龍枝は、自身が紡ぎあげた愛の「おとぎばなし」を語っているが、彼女自身がその「おとぎばなし」を全面的に肯定することが出来ていない姿を描いて物語は終わっている。それに対して

「薔薇の家」では、「おとぎばなし」を信じる益田先生の姿を描き、明るく物語を終わらせている。

この二作品の違いの一つは、悲しみの描き方にある。「抒情歌」では、恋人を失ったことの悲しみが作品の基調をなしている。しかし「薔薇の家」では、お嬢さんを失った芳子の悲しみは、益田先生にお嬢さんが亡くなったことを確認されたときの「寂しそうにうなだれた様子のみでしか示されていない。「薔薇の家」は悲しみを強調せず、美しく幸福な「おとぎばなし」を完成させることに主眼を置いている作品である。

川端康成は「少女と文芸」（『若草』大正一五年三月号）で、少女の持つべき理想の愛について、以下のように述べている。

この「みんな尤もだ」と云ふ気持、文芸を味ふ人々には一度はそこへ行着ける喜びを持つと、私は考へてゐる。小説や戯曲を読む者は、作者や作中の人物と共に各種各様の思想を生活し経験を生活する。（中略）かうした風に、世界のありとあらゆる存在に対して、理解から生れた同情を注ぎ得るやうになることは、文芸によつて授かる有難い人間開眼である。この正しい愛があつて、初めて自然人生を正しく認識することが出来る。また翻つて、自分を知ることが出来る。殊に世界の母なる女性にとつては、この広やかな愛はなくてはならぬものである。<sup>31</sup>

優しい愛の象徴としての薔薇の精と、その存在の永続を描く本作は、「みんな尤もだ」という「同情」からなる「広やかな愛」という考えに基づいて書かれた作品であるともいえる。「女同志の愛」を主軸とすることに加えて、他のさまざまな愛情関係を描いたことも、そ

の意図に拠ると考えられる。「愛」を描くにあたり、家族へのいたわり・教師への憧れ・女同志の愛・小鳥への慈愛と、具体的な対象への愛情を重ね合わせて書くことによって、読者である少女たちに「各種各様の思想の生活を経験」させ、各々の愛のそれぞれの美しさを示そうとしたのではないか。<sup>32)</sup>

「薔薇の家」では悲しみの描写はあえて避けられ、愛の肯定的な側面のみが描かれている。本作は、各種各様の「愛」の明るく優しい面を特に「美しいおとぎばなし」として形象している。

また、少女に向けた小説について、川端は『世界少年少女文学全集』（昭和三三年三月）の跋文において以下のように述べている。

はじめて少女のための小説を書いたのは、『乙女の港』なのですが、もう二十年近いむかしのことになります。その小説も、この万葉姉妹もそうですが、純粋に人を愛することのむなしさ、美しさに、作者の気持がたかぶっているようです。また、このようなすなおな愛の世界に身をおくのは、とくに、ありそうもないことや、ひみつな運命に、興味をしめすのではなく、言ってみると、作者のもののかた、ものの考え方に、ある一つのめがねをかけるということなのです。修業の一つの方法であり、こういう心の門を通ってみるまでなのです。<sup>33)</sup>

少女のために書かれた「薔薇の家」もまた、「純粋に人を愛する」「すなおな愛の世界」に身をおいて書かれ、ゆえにこそ、死や別離によつて失われることのない優しい愛<sup>34)</sup>「おとぎばなし」への全面的な肯定を創作することができたのではないだろうか。

「薔薇の家」は、川端文学における愛の「おとぎばなし」が実現を

示すことのできた作品として、ここに提示しておきたい。

## 付記

・旧漢字は新漢字に改め、引用元のルビは省略している。本文や引用資料の改行は「/」で表記している。傍線は全て筆者によるものである。「川端康成全集」は註記がない限り、昭和五六年一〇月〜昭和五九年五月に新潮社から発刊された三七巻本を用いている。

・本稿は、立命館大学日本文学会第一五九回研究会（令和三年四月一日、於・立命館大学及びオンライン）において「川端康成「薔薇の家」論——美しいおとぎばなしの実現をめぐる論考、或いは永遠の愛の可能性について——」と題し口頭発表を行い、修士論文「川端康成文学における「おとぎばなし」論——「薔薇の家」を中心に——」としてまとめ、更に加筆・修整したものである。

## 【参考文献】

- ・巖谷小波「愛の光」（『少女世界』明治三九年一月号）
- ・大橋清秀「川端康成と少女小説」（『論究日本文学』昭和三〇年一月号）
- ・久米依子『少女小説』の生成 ジェンダー・ポリテクスの世紀』青弓社、平成二五年六月
- ・居初庫太『花の歳時記』淡交社、昭和四三年三月
- ・小林一郎「川端康成と児童文学——少年少女小説を含む——」（『文学論藻』第五三号、昭和五三年一月）
- ・小林芳仁『川端康成の世界——美と仏教と児童文学と——』双文社出版、昭和六〇年一月
- ・坂本越郎訳『アンデルセン童話——薔薇——』国立書院、昭和三三年一月
- ・佐藤真衣「川端康成と少女小説——小公女の翻訳からみる川端の目指した少女小説」（『富大比較文学』第四号、平成二三年一月）
- ・張競「恋の心象としての薔薇 佐藤春夫の「薔薇をつめば」をめぐって」（『近代日本の翻訳文化』中央公論社、平成六年一月）

- ・中嶋展子「川端康成「薔薇の幽霊」と博文館「少女世界」」(『川端文学への視界 川端文学研究 2008』銀の鈴社、平成二〇年六月)
- ・中嶋展子「川端文学の「をさなごころ」と「むすめごころ」——昭和八年を中心に——」龍書房、平成二五年二月
- ・長谷川潮「少女たちへのプロパガンダ」梨の木舎、平成二四年二月
- ・羽鳥徹哉「川端康成解説」(『日本児童文学大系』第三卷、ほるぷ出版、昭和四四年一〇月)
- ・古谷綱武「川端さんの少女小説に見る日本の生活」(『児童文芸』第一四卷四号、昭和四四年三月)
- ・本田和子「ひらひら」の系譜——少女、この境界なるもの」(『異文化としての子ども』筑摩書房、平成四年一二月)
- ・吉屋信子「同性を愛する幸い」『憧れ知る頃』交蘭社、大正二二年(返らぬ日吉屋信子少女小説選②)ゆまに書房、平成一五年五月)
- ・『川端康成全作品研究事典』勉誠出版、平成一〇年六月
- ・「歌劇学校」の川端康成先生——小鳥の訪れる日に——」(『ひまわり』ヒマワリ社、昭和二四年六月)
- ・『少女倶楽部』昭和八年一月号〜五月号、七月号、八月号・昭和九年一月号・五月号〜十一月号
- ・『少女の友』昭和八年六月号、九月号、一〇月号・昭和九年一月号〜四月号、六月号、七月号、十一月号
- ・『少女小説事典』東京堂出版、平成二七年三月

## 注

- (1) 新潮社『川端康成全集』第一九卷(昭和五六年一月)に収められており、底本は初収録『乙女の港』である。本稿では決定稿を『川端康成全集』第一九巻に収録された「薔薇の家」とする。また、平成に入ってから『乙女の港』復刻版が出版され(実業之日本社、平成二三年二月)、そこに収録された「薔薇の家」をもとに、小沢真理によって「薔薇の家」を原作とした短編漫画が描かれている(『コーラス』平成二四年号特大付録である『乙女こーらす』収録)。
- (2) 初出時は父親や母親の呼称が「お父さん」「お母さん」であったのに対し、初刊本収録時にはすべて「お父さま」「お母さま」と書き改められている。
- (3) 「薔薇の幽霊」(『少女世界』第二二巻第一〇号、昭和二年一〇月号)(『川端康成全集』第一九巻収録)

- (4) 中嶋展子「川端康成「薔薇の幽霊」と博文館「少女世界」」(『川端文学への視界 川端文学研究 2008』銀の鈴社、平成二〇年六月)
- (5) 中嶋展子「薔薇の幽霊」と博文館「少女世界」(中嶋展子「川端文学の「をさなごころ」と「むすめごころ」——昭和八年を中心に——」龍書房、平成二五年二月)
- (6) 古谷綱武「川端さんの少女小説に見る日本の生活」(『児童文芸』第一四卷四号、昭和四四年三月)・羽鳥徹哉「川端康成解説」(『日本児童文学大系』第三卷、ほるぷ出版、昭和四四年一〇月)・小林芳仁「川端康成の児童文学」(小林芳仁「川端康成の世界——美と仏教と児童文学と——」双文社出版、昭和六〇年一二月)・吉田秀樹「薔薇の家・研究展望」(『川端康成全作品研究事典』勉誠出版、平成一〇年六月)・佐藤真衣「川端康成と少女小説」(『小公女の翻訳からみる川端の目指した少女小説』(『富大比較文学』第四号、平成二三年一二月)
- (7) 川端が「お伽噺」「おとぎばなし」という語を用いた作品の一覧を、管見の限り以下に挙げる。  
「彼女の盛装」(『新小説』大正一五年九月号)・「海の火祭」(『中外商業新報』昭和二年八月一三日〜一二月二四日)・「ナアシツサス」(『若草』昭和二年一一月号)・「浅草紅団」一九・二〇(『東京朝日新聞』夕刊、昭和五年一月一七日・一九日)・「絵の匂ひから」(『若草』昭和五年一月号〜昭和五年六月号)・「水族館の踊子」(『新青年』昭和五年四月号)・「水仙」(『新潮』昭和六年一〇月号)・「父母への手紙」第一信(『若草』昭和七年一月号)・「抒情歌」(『中央公論』昭和七年二月号)・「薔薇の家」(『少女倶楽部』昭和九年二月号)・「花のワルツ」(『改造』昭和一一年四月号・五月号)・「文学界」昭和一一年七月号、『文藝』昭和一二年一月号)・「乙女の港」(『少女の友』昭和一二年六月号〜昭和一三年三月号)・「女性開眼」(『報知新聞』昭和一一年二月一日〜昭和一二年七月三日)・「金塊」(『改造』昭和一三年四月号)・「東京の人」(『北海道新聞』『中部日本新聞』『西日本新聞』昭和二九年五月二〇日〜昭和三〇年一〇月一〇日)
- (8) 益田先生は、薔薇の家が二年も三年も空家であったことが信じられないということを示すのに、「住む人の愛の呼吸が、部屋にこもつてゐるやうだつたわ。やさしい人の声が、押入のなかからでも、聞えて来さうな気がしたわ」と、愛と優しさを並べている。
- (9) 張競「恋の心象としての薔薇 佐藤春夫の「薔薇をつめば」をめぐって」(『近代日本の翻訳文化』中央公論社、平成六年一月)
- (10) 坂本越郎訳『アンデルセン童話——薔薇——』(国立書院、昭和二三年一〇

月)において、訳者である坂本越郎は、「この世の中で一番気高く美しいものを求めて、自分の持つている一番良いもの」として、利他の心の美しさを描いた薔薇の童話を掲載している。薔薇は「美しい愛と詩の花束」であるとしている。マドンナとキリストとを連想させる「世界で一番美しい薔薇」や、「みんな神様がわたしに下さったもの」という信条から生じた利他心を描く「かたつむりと薔薇の木」が収録されている。

(11) 吉田絃二郎「白薔薇」(『少女俱樂部』昭和八年六月号)では、優しさで養父への愛情ゆえに亡くなる少女が描かれている。「少女の友」においては、落谷虹児が「虹児の描く絵は、いつも寂しく、春の絵を描いていてもそれは結局秋の絵でしかない」と定評されたと述べ、それは暗く淋しい自分の過去のせいであろうと説明する。そしてその随筆の末尾で「世の中で一番美しいものは、薔薇と少女だと僕は信じてゐる。いつのまにか僕は世の多くの少女のために、最も美しい絵を描きたいとそればかりを願ふ画家となつた」と、自分の絵の淋しさと少女と薔薇とを結び付けている(『秋の絵巻』(『少女の友』昭和八年一〇月号)。内山基の「紅い薔薇」(『少女の友』昭和九年六月号)は友情の裏切りの痛みとそれに対する複雑な乙女心を描いており、紅薔薇は二人の愛の思い出の象徴として描かれていた。

(12) この詩の出典はレミ・ドゥ・グルモン「薔薇連禱」(上田敏訳「牧羊神」金雄文淵堂、大正九年一〇月)であると、中嶋展子が明らかにしている。「薔薇連禱」において薔薇が偽善的にうたわれた箇所を引かず、川端が「女同志の愛」をより強調した詩としてこれを用いていると指摘している。(中嶋展子「川端康成「薔薇の幽霊」と博文館「少女世界」平成二五年二月前掲)

(13) 大正期から昭和前期の「少女小説」では、少女同志の親密な関係を描く物語が多くあり、人気であった。それらの関係は「エス」と呼ばれ、川端の少女小説でも「乙女の港」「花日記」(どちらも『少女の友』掲載)で物語の中心となっているのはエスの関係である。久米依子は「シスター」という呼称も、一九一〇年代(明治末から大正前半期)の少女雑誌中に散見されるようになる。(中略)「シスター」はまた、いわゆる「エス」という略語を派生させ、「エス」は女学生同士が恋愛のようにシスターフッドを深める仲を隠語的に指すようになるが、そうした関係性も「少女雑誌」では暗に認められていたことになる」と指摘している。(久米依子『少女小説』の生成 ジェンダー・ポリティクスの世紀 青弓社、平成二五年六月)

(14) 「歌劇学校」の川端康成先生——小鳥の訪れる日に——(『ひまわり』昭和二四年六月号)

(15) 古谷綱武「川端さんの少女小説に見る日本の生活」・小林芳仁「川端康成の児童文学」・中嶋展子「川端康成「薔薇の幽霊」と博文館「少女世界」前掲

(16) 川端康成「伊豆温泉記」『改造』昭和四年二月号(『川端康成全集』第二六卷)

「伊豆には、椿の花、蜜柑類、鯉船、石楠花、海の色、鹿、植物の暖国的な繁茂、河鹿——。石楠花は高山植物だが、天城では南国的に花を開く。熱海の区裁判所の庭には、サボテンが私の頭より高く、熱帯的なふてぶてしい茂りやうだ」

(17) 川端康成「駒鳥温泉」(『少女俱樂部』昭和一〇年二月号)(『川端康成全集』第一九卷)

(18) 川端康成「椿」(『創作時代』昭和三年三月号)(『川端康成全集』第二卷)

(19) 「川端康成全集」第二卷「解題」より。  
(20) 居初庫太「花の歳時記」(淡交社、昭和四三年三月)に拠ると、椿は春の代表花である。花期は二月〜三月であるが、温暖な伊豆ではもつとはやい時期に咲く。また、日本では古くから馴染みの深い花である。しかし万葉集の時代に登場し、その後注目されるのは江戸時代になってからであり、椿は貴族文化のみやびさとは縁の薄いものであることが分かる。

(21) 川端康成「美しき墓」(『新潮』昭和四年三月号)(『川端康成全集』第三卷)

(22) 川端康成「東京の人」(『北海道新聞』「中部日本新聞」『西日本新聞』昭和二年五月〜三〇年一〇月)(『川端康成全集』第一四卷、第一五卷)

(23) 川端康成「伊豆の娘」(『婦人公論』大正一四年八月号)(『川端康成全集』第二六卷)

(24) 川端は、「湯ヶ島での思ひ出」(未発表)に「湯ヶ島はそんなに物寂びている」と書き、それを「独影自命」に写している。(川端康成「独影自命」(一六卷本「川端康成全集」跋文、昭和三三年五月〜昭和二九年四月)(『川端康成全集』第三三卷収録)

(25) 「東京の人」では、登場する薔薇の色が、ピンクや黒、オレンジ黄等であり、「花のいろや花の形が、ばらほど多種多様な花はない」と説明されている。薔薇に様々な色があることは川端も認識しているところであり、その上で「薔薇の家」では薔薇が赤と白の二色であるのは、川端の意図であると考えられる。

(26) 川端康成「美しき墓」前掲

(27) 註(10)に挙げた坂本越郎訳のアンデルセン童話、「世界で一番美しい薔薇」において、白薔薇は病気の王子の回復を祈る女王の悲しみと結び付けて語

られていた。註(11)で挙げた吉田絃二郎の「白薔薇」では、白い花がお京を死に導いたことが描かれていた。他作品を見ても、やはり白薔薇は悲しみや死を連想させる花であるといえる。

- (28) 川端康成「ナアシツサス」(『若草』昭和二年一月)(『川端康成全集』第四卷)
- (29) 川端康成「愛」(『オール読物』昭和十三年七月号・『新女苑』昭和十四年一月号)(『川端康成全集』第六卷)
- (30) 「抒情歌」(『中央公論』昭和七年二月号)(『川端康成全集』第三卷)
- (31) 「少女と文芸」(『若草』大正十五年三月号)(『川端康成全集』第三二卷)
- (32) 「独影自命」には、「伊豆の踊子」でも「雪国」でも、私は愛情に対する感謝を持って書いてある」という記述がある。「少女と文芸」においても、後述している『世界少年少女文学全集』跋文においても、少女と愛とは結びつけて語られており、川端の文学における「愛情に対する感謝」が、少女

を描いた文学に如何に反映されているのか、今後の課題としたい。

- (33) 吉屋信子・川端康成・阿部知二『世界少年少女文学全集』第二部、創元社、昭和三十三年三月
- (34) 「改造社版『川端選集』あとがき」(昭和十三年一〇月)(『川端康成全集』第三三卷)を読むと、『少女俱樂部』掲載作品は子供向けに描いたと川端が認識していることが分かる。少女のための小説として扱われているのは、『少女の友』掲載作品であろう。しかし、序で述べた通り、「薔薇の家」は他の『少女俱樂部』掲載作品と分けられ、『乙女の港』に収録されていることから、子供のための作品というより、それより年齢が少し上の、少女のための作品として分類されたと考えられる。

(本学博士後期課程)